

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

機関名	兵庫県立大学	整理番号	F06
プログラム名称	フォトンサイエンスが拓く次世代ピコバイオロジー		
プログラム責任者	太田 勲	プログラム コーディネーター	大隅 隆
<p>1. 進捗状況概要</p> <p>○全体的な課題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムの課題は、大別して以下の3点になる。1) 次世代ピコバイオロジーの実効的な統合体系化、2) グローバルリーダー像の具体的提示とキャリアパス構築支援体制、3) 定員（5年一貫課程8名、3年次編入2名）を大幅に割っている入学者数。 <p>1) 次世代ピコバイオロジーの内実が問われてきたが、振動分光でヘモグロビンと酸素の結合距離をpmレベルで把握し酸素代謝機構解明に繋がる成果などをもとに、統合ピコバイオロジーの体系化を目指すとの明確な意思が表明された。当初の目標に沿ったプログラムの展開に期待が持てる。</p> <p>2) グローバルリーダーの第一の要件として、統合ピコバイオロジーにおける専門的研究を基盤とすること、それなくして本プログラムの目標は達せられないことが示され、また、学生のキャリアパスの目標として企業でのチームリーダーをはじめとする具体例が挙げられた。さらに、学生別の活動の記録を制度化するなど、教員サイドの努力の跡をみる事ができた。</p> <p>3) 本プログラムの最大の課題は、学生数を確保し、かつ、優秀な潜在能力を持った若者を如何にして獲得するか、という問題への打開策がないことである。一方懇談した学生の中には、少なくともアカデミックな分野での活躍が期待できそうな意欲と力量をもつ人材がいた。今後は、多分野で活躍できる能力の高い学生の獲得に向けて、より多角的な施策を進める必要がある。</p> <p>○学位プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育が体系的に構築され、中核となる教員（コア教員）が真摯に取り組んでいる。 <p>○組織・マネジメント体制等について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主的に“Lunch-time meeting”（大隅プログラムコーディネーターと直接議論する機会）を設けるなど、学生の意識と行動力が高い。ただし、コア教員以外の教員（特に若手教員）の参加意識を高めて学生と意思疎通を図ることが重要との印象を持った。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学生（とくにM1）の数が年々減少していることに関する今後の対策として、ピコバイオロジーの周知をはじめとして、広報をより一層強化して頂きたい（ホームページの改善、ピコバイオロジーと社会との繋がりへのアピールなど）。待ちの姿勢でなく、スカウトする位でも良いのではないかと。学生からも、専門家を加えるなどもっとマーケティングに力を注ぐべし、などの意見があった。学生を含め、このような活動に積極的に取り組む者の参加を求めることが重要である。 ・入学生減少の最大の原因は、平成26年度のM1の入学者から5年間の奨励金が保証されていないことにあるとの指摘が学生からなされた。大学として、学生が奨励金に留ま 			

らない期待を持てるような魅力的なプログラムとなるよう、将来構想を具体的に練る必要がある。

- 学内からの学生の受入れについては、これまでのところ、学生の所属が特定の研究室に留まっており学生を送り出していない研究室への積極的な働きかけが必要である。
- 学生主体の国際シンポジウムの企画・実行については、リーダー形成に必要な経験を積む良い機会との評価がある一方、余りにも自分たちに任せきりのため、運営上の負担が大き過ぎるとの意見が学生からなされた。学生の負担は教育効果のある範囲にとどめるべきである。
- 我々が将来の目標の一つとして提案したピコバイオロジーの教科書作成については、コア教員からは意欲が示された。この作業を通じて、教員と学生との連携が密になることを期待する。
- 県立大学改革のモデルケースになれるように、ピコバイオロジーをリードし、広がりをもたせて、しっかり構築してほしい。